猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編 ⑬

田宮 治

鎖の一戦

愛犬たちは、まるで今日の大事な一戦が分かっているかように七曲がりの登り坂で、「ジジ、猪がいるぞ！　早く車から降ろしてよ」と、突然の探知鳴きである。

「これはありがたい。猪は近いぞ」と、犬たちの目線を見ると、やはり坂の上に広がる大篠藪に猪がいるようだ。予定の狩り場に思いどおり猪が入っていたことで、私は予想が的中したことに安堵しながら、坂の上の広場に車を止めた。

「北嶋さん、猪はこの大篠藪だぞ！　これは朝から縁起がいい、早速いただきといこうぜ！」と笑いながら急いで猟支度をする。犬たちはその間も待ち切れなく、駄々っ子のように鳴き続けている。「よしよし、待て待て」と、グレ猪ゆえの早立ちを警戒して、犬たちをなだめながら、今日、猪と戦うための対策を北嶋氏と手短に打ち合わせをした。

犬たちがこの様子では、放せばすぐに猪は出ると思うが、問題なのは猪の寝ている場所である。多分、猪はいつも寝ている出峰の前の日当たり良い大篠藪だろう。出峰は全体が凄い藪で、止めたとしても恐らくまともに勝負はできないと思う。だから、今日の戦いは、この大篠藪で居残った猪をどのように攻め抜くかが大きなポイントになる。

「必ず俺が突入して猪を追い出すから、GPSを見て車で道を飛び回って、猪の先に立ち、迎え撃つ移動タッに徹してくれ」と北嶋氏に告げたのが、この作戦のすべてである。

「よし、これでよい。さあ行くぞ！」と、この一戦をマロ号、ヨシ号、シロ号の追い咬み自在の一流芸に託した。当然、車からの放犬である。

犬群は待ってましたとばかりに、マロ号を先頭に大峰筋の小道を突っ走り、七曲がりのちょうど上辺りで猪臭を嗅ぎ当て探知鳴きである。

すると、一気に大峰筋から下りている出峰に向かって一直線に姿を消した。犬群の後ろに続いていた私が北嶋氏に、「出るぞ！　やっぱりいつもの所だ」と言い終わらないうちに、マロ号の見事な威嚇が始まった。

ウーウッ、ワンワンと静けさを突き破る素晴らしい止め鳴きである。間髪を容れず、ヨシ号とシロ号が咬みに出たようで、ワンワン、ギャンギャンの連続鳴きが大篠藪を揺すり、山々に響き渡り、大騒ぎとなった。

「出たぞ！」と、私たちは大峰筋の小道で犬たちの様子をじっと見つめながら逸る気持ちを抑えて、がっちりと止め切るのを待っていた。五分くらいだったと思うが、とてつもなく長く感じた。

その時、必死で咬み止めようとする犬群の凄い攻撃を抜けて、バリバリと音を立てながら猪が突っ走った。「しまった。あと少しだったのに……」

「北嶋さん、この猪は止まらない。逃げ一手のいつもの手練だよ。ここは俺に任せて、すぐ車に戻って七曲がりを車で下りて、上って来る時に見切っていた猪の渡

り辺りに飛んでくれ。俺は打ち合わせどおり、犬たちとこの猪をどこまでも追って行くので、連絡はとりづらくなると思う。だから連絡はいいから、GPSを頼りにどこまでも犬たちの行方をよく見て、先回りして猪を撃ってくれ」と告げた。

北嶋氏は元気に「分かった……行きます」とぶっ飛んで行った。

北嶋氏よ、この一戦に咲け

猪猟の極致や頂点は、当たり前のことだが、夢の目標を立てて努力し、挑戦し続けて至難を乗り越えたその先に見事咲くものだと思っている。その意味では、いま戦っているこの大篠藪がまさに至難の戦場である。

夢の頂点に立つためには、全力を尽くして至難を乗り越え、絶対に勝ちに繋げるのが、大切な鎖となるこの一戦である。

私はその重要な大篠藪の戦場を目の前にして、「ここは俺に任せて、お前は猪の渡りに車で行け」と、全くの独断で大口を叩いたからには、何がなんでもこの大篠藪からグレ猪を追い出さなければならない。そして、犬たちとともにどこまでも追いかけることで、グレ猪を見事咬み止めさせて、「さあ、どうぞ！　刺し止め撃ちで決めてくれ」と、北嶋氏に生涯忘れられないビッグチャンスを作ってやりたいという一念である。

私はぶっ飛んで行く北嶋氏の後ろ姿を見送りながら、「待ってろよ。俺が約束どおり必ずお前の咲き場所を作ってやるから……」と、強い気持ちを押し出して、大篠藪全体が一望できる出峰の先端に走った。

犬群はますます元気にワンワン、ギャンギャンの連続鳴きで猪に追いすがっている。猪は大篠藪の一番奥の凹地を越えて、大峰の右下で北嶋氏が待つ渡りのタツに向かうつもりらしい。

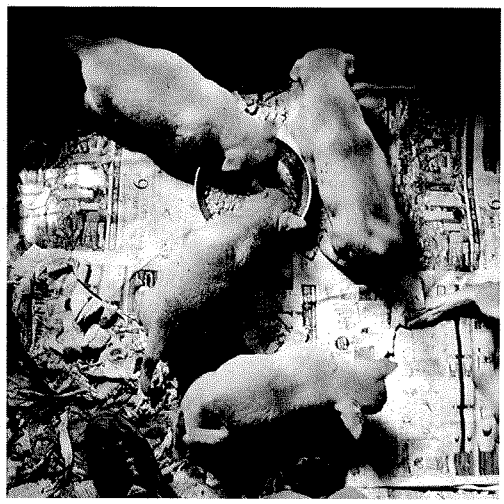
だが、逃してなるものかと、犬たちは見事なチョンガケをギャッギャッと何度も繰り返してグレ猪を引きずり下ろすようにUターンさせて、七〇メートルくらい下の沢水が流れ始める大藪で、また止めた。

「よしよし、その調子だ、頑張れ、あと一息だ！」と、怒鳴って犬たちを元気づける。猪がいつも小沢伝いに藪中を逃げる沢下から一気に勝負に出たい気持ちを抑えて、止め切るのを待っていた。

犬群はさらに迫力を増して、凄い勢いで全犬そろって咬え付いている。一時を争う大事な局面であるが、今日撃たせたい主役の北嶋氏を移動タツに専念させて車で先回りさせたからには、ここから先の激戦はすべて私の独断で押し進めて、必ず勝ちに持ち込むという、いわば単独猟そのものである。

これまでも単独猟が常だった私の攻め方は、誰にも頼らず、困った時には犬群頼みで、戦場で起こり得るすべての対策は一人で即決している。どんな至難の状況下にあっても、焦らず、慌てず、落ち着いて先手を取って勝負してきた。

ただ、今日の一戦は特別である。攻め切ることさえままならないこの至難の大篠藪だというのに、突入して猪を撃ち獲ってしまっては意味がないという、特別な真剣勝負なのである。



奈智号×ボス号の仔犬（45日）。今年も良い仔犬が生まれているが、一胎4頭か5頭が多いようだ

「特別だ」「真剣勝負だ」と、この一戦を改めて前置きしているのは、従来の猪猟法とあまりにも異なる作戦であり、説明しなければ分かっていただけないからである。

元来、猪猟法をどんなに掘り下げてみても、行き着くところはいかにして至難を克服して、猪を上手に撃ち獲るかである。

だが、今日のこの大篠藪での戦いは、突入して見事に撃ち獲ったとしても、肝心な猪猟の極致を教えたことにはならない。

何としても、この戦いをもって頂点までの道筋としたい思いは、グレ猪だろうが至難の大篠藪だろうが、猪さえいれば上等である。それが絶好の教材だから、あえて二人だけで挑戦しているのである。

その大切な主役が移動タツに専念し、必死で飛び回っている。私に突き付けられた課題は、必ずこの至難の大篠藪からグレ猪を追い出すことである。

そして、追い出した猪を犬群とともにどこまでも追い込んで、その先で見事に止め切り、主役の北嶋氏に、約束どおり一発で止め撃ちさせて、心から喜んでもらうのが最終の目的である。

本来ならば、ここは犬群の鳴き声で止め現場の状況を推し量り、藪中に一気に突入するのが俺流の攻め方であるが、犬たちがこれほど見事な攻撃を繰り返し、元気なうちであれば十中八九は勝てる戦いである。

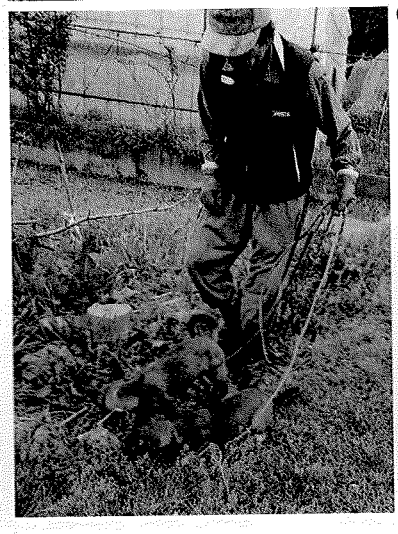
当然予想された今日の激戦に備えて、私がパジェロに乗せて来たマロ号、ヨシ号、シロ号と、ブイ号、カツ号、武蔵号、千代号の二つの犬群ならば、どんな藪中の戦いや猛猪であってもビクともしない実力がある。

猪犬は猪を止め切って、死力を尽くすところに咬み芸の本質があるので、元気なうちに猪と対決させるのも主人としての大事な責務と考えている。私は二つの犬群を猟場の状況によって別々に使い分けて、犬群の実力が発揮できるようにいつも心掛けている。

この犬群をもってすれば、どんな相手であっても、犬たちと自分ができる最高の作戦を戦いにぶつけて必ず完勝してみせる。

私が猪犬のあるべき勇姿と、凄い止め芸を示し続け、目の前の至難を乗り越えて来たのは、その時々と戦う状況に合わせて、どのように戦って撃ち獲るのが一番効率よく、猪猟技術の完成に繋がるのかを常に考えてきたからである。

そして、その先の頂点に立つためには、どの道が一番良い近道なのかなどの重要事項を何度でも繰り返し実践してやって見せることで、確実にできるまで独自の信念を押し通して、猟道の追求に頑張



（上）雪の日のマロ号とママ。仔犬は、完成した一流犬であっても、雨の日でも雪の日でも、毎日欠かさず綱を持って訓練することが一番大事な上達の近道である。名前を呼び、言葉をかけ続け、猟場で車から放しても言葉で分かるようになるまで鍛え上げることである

（左）「ほら、その先に何かあるよ」。隠しておいた猪のアバラを探している60日の仔犬たち。探し当てると争って取り合いになり、大騒ぎである。これも一つの大事な訓練だ

ってきたのである。

だからこそ、この二年間の山彦会千葉支部の若者たちと犬群の成長には素晴らしいものがあった。

特に、猪猟の成否を決定づけるのは猪犬であるとの観点から、人生を懸けて夢の目標に挑戦して、どこに出しても恥ずかしくない猪犬群の作出に成功した。

この実績をもとに実戦の場にぶつけて検証につぐ検証を重ね、気の遠くなるような歳月と膨大な私財（毎月五十万円）や労力を投入し続けてきた。そして、ようやくオリジナル（原作）猪犬（田宮系猪犬群）の完成に漕ぎ着けたのである。

ぞっくり揃った数百頭以上の猪犬軍団がこぞって、猪犬の進化・改良に貢献して日本一の山彦犬舎を目指して突き進んでいる私を助けてくれている。

基本的に猪猟の達人になるためには、一日でも多く山に出て、一頭でも多くの猪と戦い、完勝する術を学ぶことである。

また、名犬を望むのであれば、一頭でも多くの仔犬を慈しみ大切に育てて、頑張って三、四頭の猪犬を見事に仕上げてみることである。そうすれば、犬群が猪猟道の道案内をしてくれ、猪止め猟の疑問を順次解決してくれるはずである。

ブイ号、カツ号、武蔵号、千代号の兄妹犬の見事な止め現場。何の下草のないこんな大杉林で、きちっと止め切る猪犬こそが一流の猪犬だと思う

小道のそばの切り倒した杉の木の下にヨシ号たちが押し込めたイノシシを2メートルの距離から撃って決めたもの

つまり、猪犬さえぞっくり揃い、一流芸になっていれば、大猪だろうが大篠藪だろうが、恐るに足らずだ。どんな戦い方も思いのままで、見せたい作戦も必ず成功できるものである。

何度も繰り返し言っているように、猪猟は犬次第であり、その醍醐味もまた犬芸の完成にかかっている。

私がこの信念に基づき、「猪犬と登る」というタイトルで全国に発信し続けているのは、猪猟の道順と猪犬のあるべき姿を実戦に乗せ、ありのままを送り届けることで、猪犬を知り、猪猟の醍醐味を十分に味わってほしいとの願いからである。

（つづく）

全猟オリジナル
カー・バッジ
好評発売中　5000円（送料共）